

エジプト日本学校(EJS)における Tokkatsu の受容とその影響
——EJS 教員対象インタビューの分析から——

○添田 晴雄 安部 恭子 土屋 愛 相庭 貴行 秋山 麗子
(大阪公立大学) (帝京大学) (熊谷市立久下小学校) (筑波大学大学院生) (神戸松蔭女子学院大学)

1. 本発表の目的

エジプトでは、2016年に日本と合意した「エジプト日本教育パートナーシップ」の下で、特別活動を中心とした日本式教育の導入が進んでおり、日本式教育のモデル実践を行う「エジプト日本学校」(EJS)が51校に達している。当初は掃除、日直、手洗いなどの日本式の学校生活が脚光を浴びたが、現在はそれに加え、学級活動(学級会、学級指導)がEJSに普及している。ただし、運動会、バザー、遠足などを除く学校行事、児童会活動、クラブ活動は今のところほとんど実施されていない。また、約2万校あるとされる(EJS以外の)公立学校では、Tokkatsuがナショナル・カリキュラムの一部となっているにもかかわらず、その普及はこれからの課題となっている。

本発表では、現在、EJSを中心に普及している「特別活動を中心とした日本式教育」をTokkatsuと呼び、TokkatsuがEJSにどのように受容され、教科教育を含むEJSの教育にどのような影響を与えたかを、EJSの教員を対象としたインタビュー結果を分析し、日本の特別活動のあり方を考察することを目的とする。

2. 調査の方法

2023年12月25～28日に、EJSの教員合計8名に対して、各約1時間のインタビューを行った。

インタビューガイドは、「非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証に関する研究」のCチーム(児童インタビュー、Tokkatsuオフィサーインタビューを含む)で検討し、聞き取りは、現地通訳を通して、「非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証に関する研究」によるエジプト調査渡航チームのうち5名(相庭貴行、天野幸輔、京免徹雄、鈴木純一郎、添田晴雄：敬称略)が行い、分析考察については、本発表の発表者の5名が行った。

3. 分析の方法

本研究では、通訳を通してインタビューを行わなければならないという大きな制約があった。通訳は現地で雇用したが、インタビューの録音の文字化をAIを使用せずに手作業で実施したものの、通訳の日本語文が曖昧であったり、意味不明であったりする箇所が少なくなかった。

そこで、発表者は、まず、通訳者の日本語文すべての解釈について文脈も踏まえて検討を行った上で、公式な解釈文を確定した。そして、それを共通の分析対象とすることにした。

また、通訳を介した調査の限界を含む今回の調査の限界を確認した上で、教員の回答内容を分析した。

4. 分析結果(一部)

- Tokkatsuの考え方は、エジプトの伝統的な価値観と合致するところが多い。
- 話し合い活動を通して、児童は自分の意見に反対する相手の意見も聞くようになり、恥ずかしがりの児童も(一方的に反対されることが少なくなったので)自分の意見を言えるようになった。
- 少数意見の児童が同調圧力により自分の意見を安易に引っ込めるといった心配は皆無で、むしろ、自分の意見を主張し続けた先にある合意形成のあり方を模索していた。
- 教師が児童の意見を聞くようになった。
- 学級活動の話し合いのおかげで、教科の授業でもグループ学習や学び合いができるようになった。
- 教師が集団で児童の問題を話し合って解決することが多くなった。

5. 考察

これらを踏まえ、日本の特別活動のあり方を考察する。

謝辞:本研究は、令和5年度 文部科学省 EDU-Port ニッポン調査研究の助成を受けた。